

詳細解説版

「現代の僧侶」を考える － 検討結果資料

作成：現代の僧侶を考える会
（監修：一般社団法人お寺の未来）

現代の僧侶を考える会の趣旨・進め方

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

これからの僧侶の規範と僧侶像

「現代の僧侶を考える会」の趣旨

人口減や過疎化による檀信徒の減少、僧侶派遣業者の台頭、葬儀の小規模化・簡略化など、お寺、そして僧侶を取り巻く社会環境は急変しています。

日本仏教を担う核心は、檀信徒をはじめとした生活者に仏教を伝える一人ひとりの僧侶です。現代における僧侶像や求められる規範を僧侶自身が主体的に明らかにし、その規範を主体的に励行することにより、社会や生活者からの信頼は一層醸成され、日本仏教の豊かな味わいが次世代に受け継がれることにつながっていくでしょう。

「現代の僧侶を考える会」では日本仏教のこれからを担う仏教者有志が集い、生活者視点をまじえながら広く闊達な衆議を深め、これからの僧侶像と具体的な規範を宗派・肩書き・立場を超えて定め、現場での着実な実践と、現代的な布薩の創造につなげていくことを目指します。

僧侶像・規範の検討にあたっては、委員会メンバーを中心に2016年10月から全13回(50時間超)の議論を重ねるとともに、2017年3月には東京で約90名、7月には約40名の僧侶有志をまじえて一層の議論を深めました。

今後は、様々な有志・団体との連携を通じて、本会の願いや検討結果を広く共有していきます。

【委員会メンバー(立ち上げ時)】 ※順不同

[座長] 岡澤慶澄(真言宗智山派 長谷寺住職)

[委員] 網代豊和(浄土真宗本願寺派 西照寺副住職)、久住謙昭(日蓮宗 妙法寺住職)、倉島隆行(曹洞宗 四天王寺住職)、成田淳教(浄土宗 感応寺住職)、細川晋輔(臨済宗妙心寺派 龍雲寺住職)、渡邊元浄(真宗大谷派 正蓮寺住職)

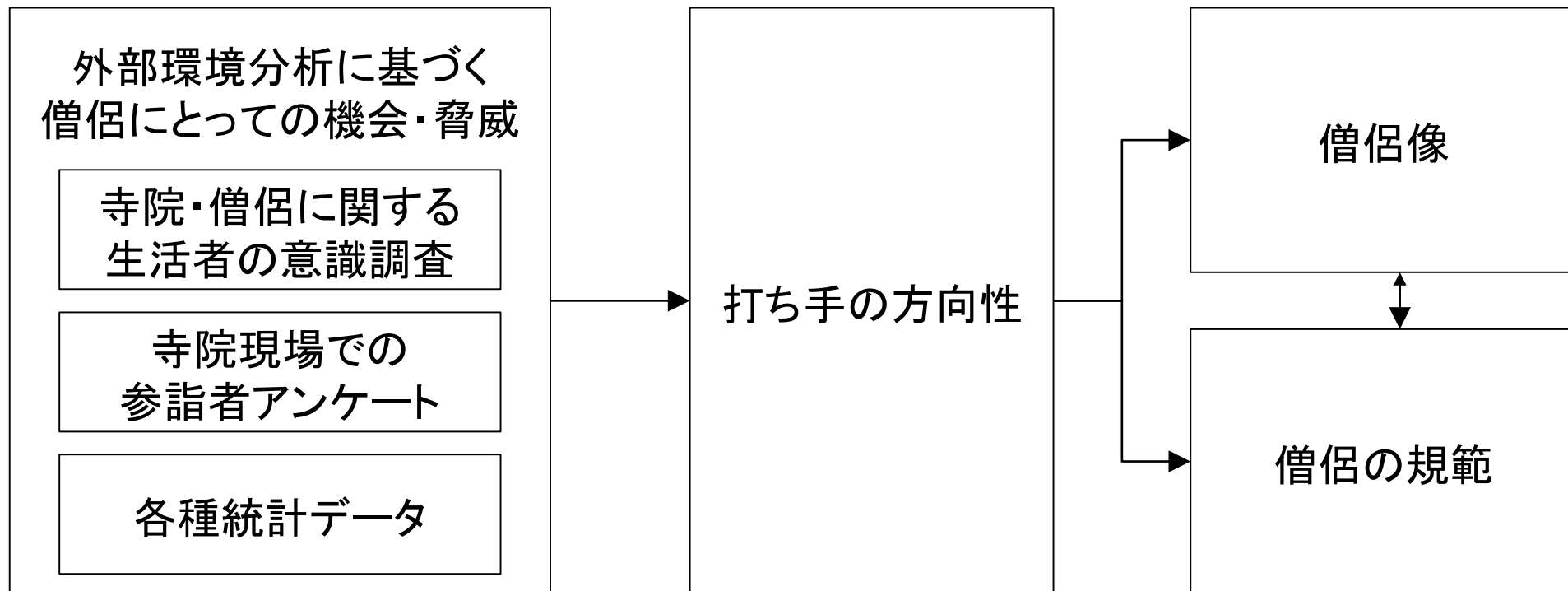
[事務局長] 井出悦郎(発起人:一般社団法人お寺の未来代表理事)

[顧問] 松本紹圭(未来の住職塾塾長)、松島靖朗(おてらおやつクラブ代表)、木原祐健(神谷町オープンテラス店長)

[生活者] 遠藤卓也(まいてら編集長)、松崎香織(未来の住職塾事務局長)

検討の進め方

本会では、受け手である生活者視点をふまえた外部環境分析を起点に、これからの「僧侶像」と「僧侶の規範」を具体化しました



宗派・立場を超えた多様な視点による
寺院・僧侶の現場実態に関する知見・情報

現代の僧侶を考える会の趣旨・進め方

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

これからの僧侶の規範と僧侶像

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

－ 急変かつ多様化する死生観への個別対応 1/2

僧侶にとっての機会・脅威

打ち手の方向性

「機・脅」あの世を信じる人が50歳代以下で増加し、高齢者との逆転現象。輪廻転生など、死生観の変化の中身を見極め、慎重に対応する必要

- ・50歳代以下ではあの世を信じる人が、信じない人よりも多く、60歳以上の世代と逆転した傾向を示す
- ・「君の名は。」は輪廻転生が若者に流行していることの象徴。「あの世」という言葉の頻出は現世に満たされないからではないか
- ・一方、今の若者の輪廻観は、地獄等はなく、「死んだら自動的に天国に行ける」という安易な考えとも捉えられる
- ・平日は満たされないが、ハロウィンのような非日常の盛り上がりで満たされる人も増えているのでは(=瞬間の刹那的享楽に満足する、生きがいの貧困)
- ・若者はよい子で、外れたことをするのを嫌がる。世界への信頼が揺らぎ、ネット上に広がる多くの村社会に囲まれ、かなりのストレスを感じているのでは

「脅」多死化社会の中で、死生観の希薄化傾向が進展する可能性

- ・終末医療で終末期の家族が自宅におらず、死のリアリティが日常から欠如。多死化で一つ一つの死が軽んじられ、死生観の希薄化(死んだら終わり)が進む
- ・地方から首都圏に移住しても同宗派寺院の檀家にならないという、首都圏では信仰の過疎化が進展。死生観を支える基盤は弱体化

お寺に集う人主導の表現活動が進む環境が整えば、仏教との関連を自ずと考え始め、死生観形成につながる

- ・現代の人たちが驚く象徴的な物語を、仏教側が描くことが必要
- ・仏教の価値は僧侶が頑張らなくても広まる。僧侶の役割は仏さま(仏性)の邪魔をせず、菩提心が育つ環境を整えること(=ご本尊に信者がつくことに努める)
- ・表現者は僧侶でなくて良い。表現をしたい人がお寺に集う中、自ずと仏教と関連する「意味を見出す」姿勢が生まれ、死生観形成につながる

人生経験が豊富な年代には、生前戒名授与を通じ、残りの人生の生き直しを考える機会を提供

- ・人生経験・境遇の積み重ねによって、仏教の価値・意味が伝わる環境が整う
- ・仕事で頑張ってきた定年後の人のほうが伝わる。還暦を契機に生前戒名の授与を通じ、どのように生き直すかを考える機会を提供

死生観が浮遊する時代だからこそ、僧侶が仏教の伝統的な死生観を率直かつ断定的に伝えることは意味あり

- ・死生観があやふやな時代だからこそ、良い意味の脅し(例:amazonだと成仏しない)も含めて、仏教に裏付けられた死生観を率直に伝えることが重要
- ・お寺と無縁の人に「葬儀・お墓はかくあるべし」と、僧侶が伝えるのは説得力がある

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

－ 急変かつ多様化する死生観への個別対応 2/2

僧侶にとっての機会・脅威

打ち手の方向性

[機・脅] 単身、独居老人、継承者なしに加え、性的マイノリティの増加により、従来の家族観(共同体感覚)がゆらぐ時代

- ・ 単身、独居老人、継承者なしの人が増え、今までの家族観が通用しなくなる
- ・ 福島で被災した子どもから性的マイノリティを自覚する声がある。今までは男女が結婚・出産の流れが普通だった家族のモデルが今後は前提ではなくなる

[機・脅] VR技術の発達により、従来の人間観がゆらぐ時代

- ・ 「身体＝私」という素朴な人間観に対し、VR技術は心身を切り離す。「本当の私は？」という宗教の永遠の問いが中心命題となっている

伝統的家族観が廃れる中、血縁を超えた疑似家族的な関係性構築が重要。お寺の緩さが良い意味で共同体感覚の形成に寄与する可能性

- ・ 血縁が途絶える中、血脈やメリット・デメリットを超えた疑似家族的な枠組み・ストーリーが必要
- ・ 若・壮年期に疑似家族的な関係性(＝住職への信頼)を構築できれば、生前契約につながり得る
- ・ お寺の良さは緩さ。会話のテンポ、非問題解決志向、同じ方向・景色を見る縁側的コミュニケーションがゆっくりした時間の流れを感じさせ、共同体感覚を強める

仏教の根源的思想や、永代供養というお寺が持つ本来機能を軸に、性的マイノリティの方にも門戸を開くべき

- ・ 檀家寺は永代供養というシステムの提供が本来役割。今後は個人墓でも、永代供養付個人墓が普通になる
- ・ パートナーシップの二人だけのお墓は、死後一定期間経過して永代供養墓に移るという流れが自然
- ・ 性的マイノリティの方の受け入れは、住職の感覚ではなく仏教に準拠。お釈迦様の平等性や、真剣な愛は不邪淫戒ではない等、仏教の根源的教えを伝える

【論点】

人間観の急変に寺院・僧侶はどう対応するか？

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

－「型」の本質を基盤とした世俗化への積極対応 1/2

僧侶にとっての機会・脅威

打ち手の方向性

[機] 世俗化は、生き方論の仏教が求められる現状に追い風の可能性。修行の日常実践や、宗教的通過儀礼との接触で、仏教が現代に意味ある形で作用

- ・ 社会・仏教界双方で、寺院・僧侶の多様なあり方・活動に寛容的な認知が広がる、世俗化の流れは機会
- ・ 坐禅・修行体験・御朱印には若い世代は肯定的。ストレスや不安のある社会で、伝統的な修行法を日常に取り入れる生き方論的な立ち位置が仏教に求められているのでは(資本主義からの価値観の変化もある中、仏教界が適切に対応しないと、求めが失望に転換する可能性)
- ・ 家族ではなく、日常の話や、家族・人間関係の悩みを聞いてくれる、信頼できるパートナーを求めているのでは
- ・ 先祖供養に限らず、水子・ペット供養、祈願・厄除け・お祓い等、宗教的な通過儀礼は今後も求められる可能性は十分にある

「受容→(一緒に)同行」が、参詣者に寄り添うあり方

- ・ 受容し、苦しみに一緒に向き合う(例:一緒に坐り(一緒に行をする)、足の痛さを共に感じる)

「受容してくれる存在」という認知を醸成し、口コミを広げていくためにも、今後はお寺のホームページが重要

- ・ これからの時代は、お寺にホームページがないと世の中に存在しないと見なされる
- ・ 理想は口コミによるお寺の認知拡大だが、お寺を好きになったご縁の重なりによる口コミの広がりには時間が必要。そこに至るまでの補完にもホームページは重要
- ・ ホームページはWelcomeの姿勢(お寺が受容してくれる)を伝える。ホームページ経由の問合せ・依頼を増やすには、こまめな情報更新と迅速な対応が大切

仏さまが見守る本堂で、まずは傾聴に徹して受容。対機説法に移行しながら対話で気付きを促す

- ・ 根源的な問い・悩みに至る前に仏教的な答えを提示すると相手の深まりを阻害。傾聴に徹することが重要
- ・ 宗教の「ほどく」機能として、人間が縛られた一般的な価値観と異なることをあえて許容しながら、自覚的に気付きを促し、深めていく対機説法的な対話が大切
- ・ 仏さま(時空を超える第三者)がいる本堂の場の力は大きい。見守られている実感は、お寺を離れても続く

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

— 「型」の本質を基盤とした世俗化への積極対応 2/2

僧侶にとっての機会・脅威

【機】 土着性を体現する寺院・住職こそ、地域課題に対応できる可能性

- ・ 地方では人口過疎化で地域共同体が消滅する中、寺院活性化は困難
- ・ 住職は地域の関係性・歴史(屋号等)を知る、土着性を体現する存在。地域課題に対し、行政ではない地域機能としての寺院・住職の役割がある

【機】 世俗化は、生き方論の仏教が求められる現状に追い風の可能性。修行の日常実践や、宗教的通過儀礼との接触で、仏教が現代に意味ある形で作用

- ・ 社会・仏教界双方で、寺院・僧侶の多様なあり方・活動に寛容的な認知が広がる、世俗化の流れは機会
- ・ 坐禅・修行体験・御朱印には若い世代は肯定的。ストレスや不安のある社会で、伝統的な修行法を日常に取り入れる生き方論的な立ち位置が仏教に求められているのでは(資本主義からの価値観の変化もある中、仏教界が適切に対応しないと、求めが失望に転換する可能性)
- ・ 家族ではなく、日常の話や、家族・人間関係の悩みを聞いてくれる、信頼できるパートナーを求めているのでは
- ・ 先祖供養に限らず、水子・ペット供養、祈願・厄除け・お祓い等、宗教的な通過儀礼は今後も求められる可能性は十分にある

【脅】 世俗化を進める中で、宗教として大切なものを失いかねない葛藤

- ・ 開かれたお寺づくりを志向し、人々に親しまれることによって、宗教としての大切なものを失うジレンマがある

打ち手の方向性

地域の社会資源と中立的に縁をつなぐハブ機能化

- ・ 生老病死に関する自治体や、各種団体の活動に協力(例:鬱病支援の団体につなげる)

土着性を体現したお寺が、仏の利益に触れられる縁日を営むことは、共同体意識の醸成に大きな力を持つ。縁日を意識した活動の工夫が重要

- ・ 縁日は共同体意識を創造。祈願は「自分(世俗)のタイミングではなく、仏さまのタイミング(縁日)に願いを合わせる」あり方が重要
- ・ 仏さまの縁日(観音さん:18、お地蔵さん:24)の強調で、縁日のメッセージ性は拡大。おてらおやつクラブも縁日に発送することで、仏さまの功德とのつながりが増す
- ・ 今後は「祈り」に加え、「(一緒に)功德を積む具体的な行為(例:掃除、寄付、近所のおやつ集め)」を組み合わせることが共同体感覚醸成のためにも重要

僧侶の本分は型の伝承。型の本質を知り尽くし、「守」る先に、「破」「離」による型の発展がある

- ・ 時空を超えて受け継がれた型を守るのが僧侶の役割。複数人で繰り返し、実践されることが大切
- ・ 守破離。今の人は「(型の)守」がない。型の中核の論理を知り尽くし、まずは「守」ることが重要
- ・ 亡き人の魂があたかもあるように合掌する。日常のお勤めで、本尊との関係で自分が養われる必要
- ・ 葬儀も型が崩れ、個人のオリジナリティが軸に。全国的に人口流動がある中、全国で同じ質の提供も大切

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

－ エンディングステージにおける価値提供の仕組み再構築 1/2

僧侶にとっての機会・脅威

打ち手の方向性

【機】 amazonが市場を後押しする中、お寺葬が機会となり得るのでは

- ・ 全国の28%は菩提寺がない人だが、僧侶にお経をあげてほしいという市場は84億円。amazonは市場を後押し
- ・ お寺葬は、葬儀前の暇な時間にパンフレットを読んだり、朝のお経と鐘を聞いてもらえる。葬儀ホールに飽きが来ている分、お寺葬に機会がある
- ・ 「知っている人の葬儀ができる」のが世襲化の良い所

【脅】 葬儀社による宗教行事の主導権強化が進展。一部僧侶も傾向助長

- ・ 葬儀社による葬儀の告別式化が進み、別れであるとともに仏との出会い直しの機会でもあるという要素が希薄化(葬儀社も自分の首を絞める)
- ・ 老いから死への長期化に伴い、寺院との関係が疎遠・希薄化する中、葬儀社が死の前後にバリューチェーンを着実に広げている
- ・ 法事の取込みも進む中、宗教施設の骨抜きが進むとともに、寺院・僧侶の部品化が進展
- ・ 葬儀社へ多額マージンを許容する僧侶が存在。宗派内部に脅威あり

【機】 死者の記憶を保存し続けるお寺は永代供養の時代にこそ安心を提供

- ・ 永代供養の遺影は、お参り時に永代供養墓に置くと、その人の墓になる
- ・ 法律では死者には人格が認められない。お寺はこれからも死者の記憶を保存し続ける主体(例:過去帳、戒名、寄進物、集合写真、遺影)

【機】 生活者の過半数が、死後の物事の生前決定を望む

- ・ 生活者の約6割強(※お寺の未来調べ)が、生前に死後の様々な物事を決めておくことに肯定的な意向を示す

枕経には最優先かつ最速で取り組むべき

- ・ 枕経で適切に接すれば、遺族の意識が変わる。枕経には葬儀社より早く駆けつける必要

戒名の意味の伝達、伝統的葬送儀礼の復活、功德の強調等に、従来以上に積極的に取り組む

- ・ 葬儀の主役は故人。戒名は故人の生前も含めた、遺された人にとっても新しく出会う意味ある名前。葬儀では戒名をしっかりと伝えることが大切
- ・ 納棺(旅支度)や野辺送りなど、昔の葬送儀礼を式次第に組込むことが、葬儀の質を高める。同時に、導師としての僧侶の重要性が増す
- ・ 靈魂に合掌する、功德を積む(例:先祖の眠るお寺で掃除)と、先祖が守ってくれる等の感覚を強調

寺院の信頼を活かし、死後の安心にもつながる生前からの関係性づくりを促進するバリューチェーンの強化が必要

- ・ 一人ひとりを檀徒として接せられるよう現在帳整備が大切
- ・ お寺は業者よりも地域からの信頼があり、一人身でも安心できる地域レベルの集まりを創造できる可能性
- ・ 伝統的な行事(例:法話会)に公共性(例:クリーン活動)を付与することで参画が促され、相互の縁づくりも進む
- ・ 死後の安心とつながりを担保する、仏教思想を背景とした寺院版の生前死後事務委任契約の仕組みの構築が重要
- ・ 明確な理念と具体的な取り組みを通じて、寺院が死後の様々な事柄の相談相手たりうるという認知を広げる必要

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

－ エンディングステージにおける価値提供の仕組み再構築 2/2

僧侶にとっての機会・脅威

打ち手の方向性

【脅】 葬儀のお布施に依存した寺院運営は厳しくなる

- 生活者のお布施の金額目線は非常に厳しい水準(※お寺の未来調べ)であり、葬儀等でのお布施に依存した寺院運営は生活者との軋轢につながる潜在リスクが増大

【脅】 「争族」時代における家族関係の崩壊リスク

- 家督相続的な慣習がほぼ廃れ、実質ともに法定相続の時代になることで血みどろの「争族」時代に突入。相続の過程を通じた家族関係崩壊のリスクが潜在的に大きい

失敗を恐れず、伝統的な収支構造から脱却する挑戦を積み重ねる

- 本業に悪影響を与えない範囲で、お寺のダウンサイジングにも取り組む必要(例:お堂の統廃合)
- 葬儀布施を臨時収入にする発想で、違う収入基盤構築に挑戦(「やらないでつぶれるなら、やってつぶれたほうがいい」の精神)

お布施の納得感を醸成する説明の工夫や、物語性の語りが重要

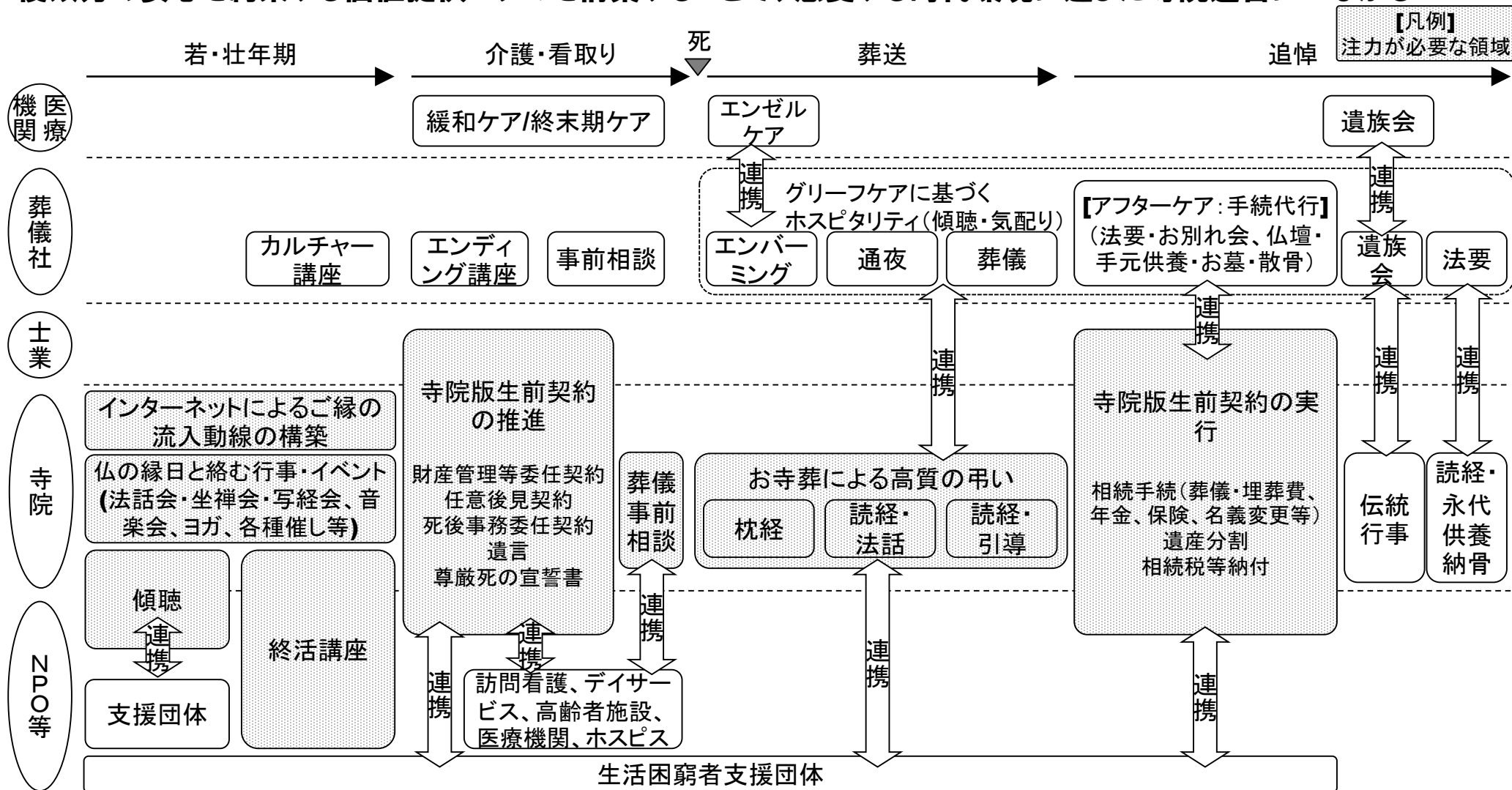
- お布施の用途、お寺の護持から逆算された金額水準、お布施は仏さまへのお供えであることなど、説明責任の工夫が必要
- 悠久の時間の縁起に故人の命を位置づけて物語ることで、人生を超えた時間価値を感じさせ、お布施への納得が高まる

法定相続の時代に、仏教的意味合いや、永続主体という強みの点から、お寺が相続に積極関与することの意義が大きい

- 遺産相続は先祖の業の相続。住職が語る相続は、仏の教えに基づき、円満におさまる方法を伝えるあり方
- 崇りは、故人がいないのにこの世の人に悪影響を残すこと。後世に良い関係を残さない不手際は崇りになる。残した人を健全な関係性に編み戻して死ぬことが「良い」死に方
- 仏教的にも遺言は重要。公正証書遺言は理想だが、辞世の句やエンディングノートも効果的。後世への良い言葉・メッセージが紡ぎだされやすい場・環境作りがお寺の役割
- 儀礼は将来へのしわ寄せを緩和。四十九日等の機会に「遺言書はさみ入れの儀」等を設ける。相続が始まる節目の提供になり、法事が家族にとって新たなスタートとして意義ある場に昇華
- 遺言は預かる主体の継続性が大切。お寺が預かる意味も大きい

(参考)エンディング領域におけるこれからの寺院経営モデル

仏教的伝統と現代性を調和したご縁動線の構築と傾聴を軸に、様々な地域資源との連携で各世代の死生観を受容しながら、家族を超えた共同体感覚の醸成を目指す。専門家と連携したエンディングの生前契約を推進し、生前・死後双方の安心を約束する価値提供モデルを構築することで、急変する時代環境に適した寺院運営につながる



現代の僧侶を考える会の趣旨・進め方

僧侶にとっての機会・脅威と打ち手の方向性

これからの僧侶の規範と僧侶像

「僧侶像」と「僧侶の規範」の考え方

【僧侶像の考え方】

僧侶の多様性を大切にするため固定的な僧侶像は定義せず、それぞれの僧侶が規範をふまえた上で、自らが目指したい僧侶像を主体的に定めることとします

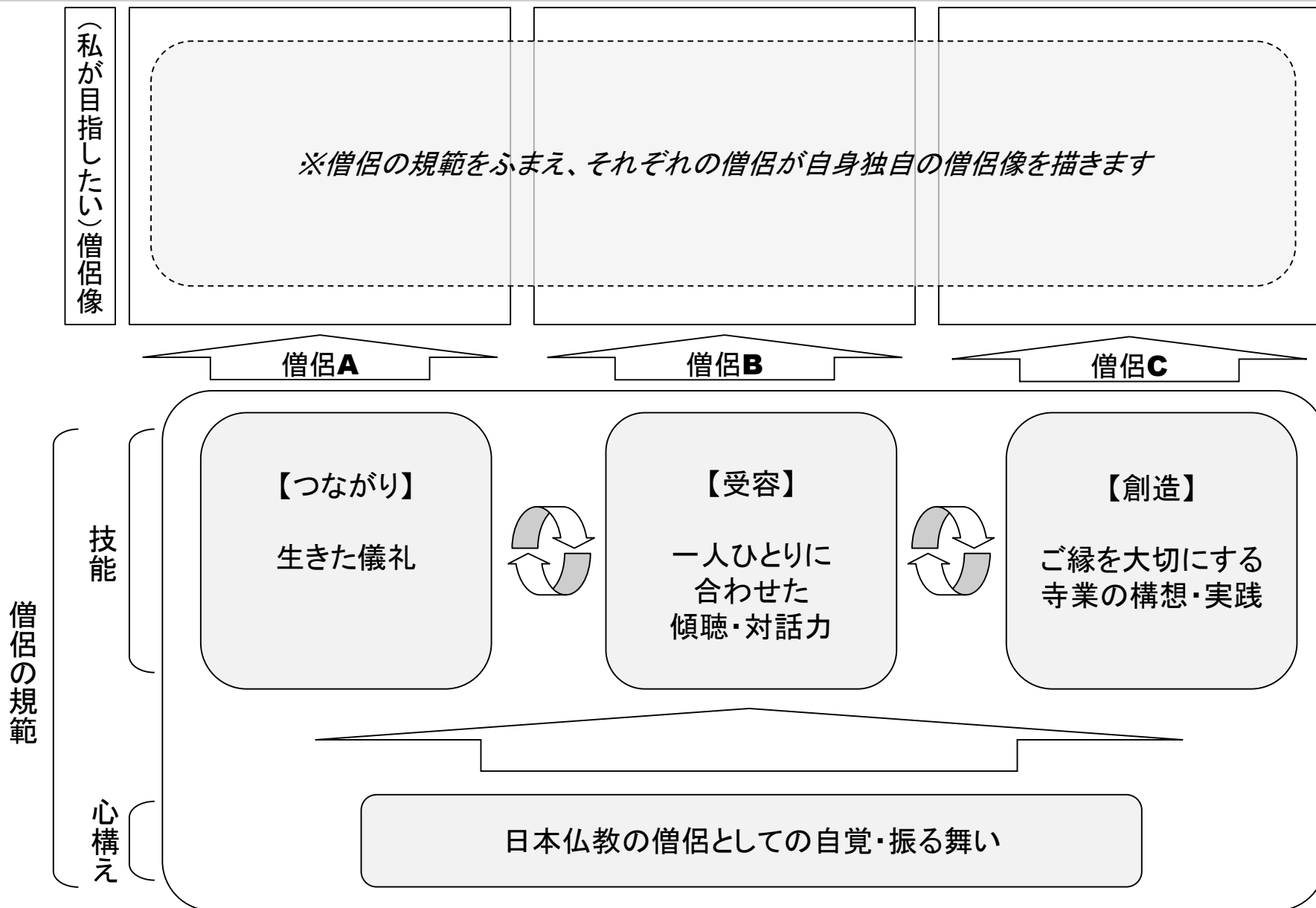
※僧侶像を定める際は受け手視点を大切に、生活者(檀信徒や地域住民)の声に耳を傾けましょう

【僧侶の規範の考え方】

僧侶に求められる規範が、精神論と技能のいずれにも偏らない中道として機能するよう、規範を「心構え」と「技能」という構造で決めました

- 「心構え」は、日本仏教における僧侶が、僧侶たる所以として有すべき共通要素とします
- 「技能」は、宗教の基本機能である「つながり」「受容」「創造」の視点から、基本的な技能を絞り込んで定義します
 - 三つの技能は、全てを完璧にするというよりも、僧侶が自身の得意分野として特に伸ばしたい技能を見つける羅針盤としています
 - 三要素に含まれない自身の得意な技能は、僧侶像を具体化するにあたっての自身の特長として積極的に加味することとします

「僧侶像」と「僧侶の規範」の構造



僧侶の規範

－ 日本仏教の僧侶としての自覚・振る舞い 1/2

僧侶にとっての全ての根幹は慈悲

- ・ 僧侶の信心の根幹は仏の慈悲であり、慈悲の根源には仏の智慧がある。智慧から派生する慈悲に依るならば、僧侶は仏道を外れることはない
- ・ 四弘誓願をはじめ、仏教各宗派では慈悲を根底に置いている
 - － 白隠の絵の源は慈悲(衆生を悟らせたい)。臨済宗では、慈悲のために、自分を明らめるために坐禅を行なう
 - － 真宗において、衆生は阿弥陀様の慈悲をもよおされる
 - － 曹洞宗も、只管打座で心身脱落をして、慈悲がもよおされると捉えられるのでは
 - － 観世音の真言は、オンマカキャロニカ(大悲。サンスクリット語で共に振るえる、共に悲しむ、一緒に泣く)
- ・ 慈悲を信じる心があってこそ僧侶。僧侶がなぜ僧侶なのかという根源理由も、仏の大悲に対する信心こそがあってこそ。従って、僧侶がなぜ僧侶になろうと思ったかという原点も、慈悲に沿っていることが理想
 - － 仏教「を」学ぶのと、仏教「で」学ぶのは違う。人生を仏教「で」学ぶ僧侶が人に求められているのでは。仏教の上に人生が成り立つことが大切
 - － 世襲の僧侶養成は「を」で始まる。大悲の根底にある智慧とともに、人生の謎に向き合う契機を与えることが、師には必要
 - － 信心が、信仰者としての使命感への気付き(菩提心)につながる

慈悲は、僧侶にとってあらゆる物事の判断軸

- ・ 慈悲(悟り(抜苦与楽)に向かわせること)は、儀礼、遺族への対応、世俗との良い距離感など、全てのクオリティに関わる
- ・ 信心が基盤となってこそ、変えるべきもの(残さないもの)と変えてはいけないもの(残すもの)を精査できる。多様性が認められる世俗化の中でタガを外さなかったり、寺院内のお堂統合や寺院そのものの統廃合を判断する際にも信心が基盤となる

他者との共感や疑似家族的な関係を構築するためにも慈悲は不可欠

- ・ 慈悲は、誰かの苦しみを我が事として向き合えるかということであり、血縁を超えた疑似家族的なあり方をつくっていくためにも大切(世界の幸せが来なければ、自分の幸せは来ないという感覚)
- ・ 悲しみを常に共有できないが、初七日・中陰・回忌を共にするのは孤独にしない大悲の表れ。各地のお寺で参詣者が慈悲を感じられる営みが大切
- ・ 慈悲・信心等の便利な言葉に逃げ込むことを建前にせず、仏様の教えと共に生きる意思を持ち、周りの人と共にありつづける決意と行動が重要

日本仏教における「ご縁」の豊かな意味合いを知悉し、ご縁を大切にし、信頼する姿勢は僧侶の基盤である

- ・ 日本仏教において「ご縁」には様々な意味がある。仏と縁が結ばれる仏縁、全てはただ無常の流れの中にあるという縁起、人と人との出会いというご縁。その豊かな意味を知らなければ対機説法はできない
- ・ ご縁を大切に作る姿勢や、ご縁そのものを心から信頼することは、仏の本願に沿うものであり、僧侶の基盤的要素である

僧侶の規範

一 日本仏教の僧侶としての自覚・振る舞い 2/2

通途への理解も深めることが、別途の信仰心を深めるとともに、人々の苦悩への向き合いの幅を広げる

- ・ 通途(通仏教)は対社会で、別途(宗派的解釈)は対宗派内にベクトルが働く。元々は総願(四弘誓願)を具体的に深めていくものが別願であり、別途における信心の味わいを深めていくためにも、通仏教的なことを知る必要がある
- ・ 現場では通仏教的なことも含めて色々と聞かれる一方、別途は個別の物語性が強い。特に死者儀礼と紐づく血の論理が強く、初心者には親しみづらい場合もある
- ・ 人間の多様な苦悩の受け皿として別途が発展したと考えられ、別途は薬の処方箋とも言える。しかし、処方箋の前に、何が原因かを総合的な視点から診断することが重要。そのためには通途が大切になることに加え、僧侶が野に出て自らの処方が効くかを実体験で学ぶことが重要

見えない速度でゆるやかに変化するものを守るため、僧侶は超長期視点で考えることが大切

- ・ 仏法という真理を背景に、徐々に変化しながら超長期的に継続するのが、僧侶やお寺が保つべき価値観
- ・ 諸行無常の世に、お寺は真理の象徴として、時流に流されず日常風景にあることが大切。伝承の型を型のまま継承するのが重要
- ・ 時には積極的に変化の判断を保留することは、世代毎の部分最適ではなく、超世代最適の判断になりうる

出家者たる僧侶が「挑戦心」を持つのは当然のことであり、「挑戦」は全ての技能に通底する

- ・ 出家そのものが挑戦であることから、僧侶が捨て身の挑戦心を基盤として持つのは当然のことであり、全ての技能にも通底する
- ・ 時に固定費は行動を制約するが、良い意味でお寺・僧侶には固定費(人件費)の考えが希薄。だからこそ、挑戦できる環境にある

地域の信頼を前提とした、仏教的な生き方を示すリーダーシップが僧侶には求められている

- ・ 時間的に積み重なった関係性が前提となり、昔は飲んだくれの僧侶も愛されていた。人間的な弱みも見せることも大切であり、それが同じ風土・文化で生きる安心感となって、僧侶が土着性の象徴として地域に受容されることにつながる
- ・ 和顔愛語による僧侶の人柄は、地域のファシリテーター的役割を果たしうる。中立的立場だからこそ、奉仕の精神として地域活動のまとめ役(町内会、PTA等)を積極的に受けられる可能性。地域の多様性に対応するには学び・向上心・発信力が必要
- ・ 僧侶が家族を持つという生活者の側面は、必ずしも弱みだけではなく、世俗化の中で人々の悩みと向き合う上で強みになりうる
- ・ 本堂・自然(季節)を基盤とした、日々の朝課(=歴史の連続性を背景とした祈り)が、僧侶としての安心・信頼につながる。僧侶は布施なきお経をたくさん読むことや、木と鳥にお経を読むという意識・行為が大切ではないか
- ・ 地域と仏教の出会いの機会を広げるために気前よく喜捨したり、信頼資本を基盤とした地域からのお願いに気前よく対応する
- ・ 生産活動ではなく、お布施を預ける存在(利他的姿勢を示し続ける生き様。あの人にまた会いたいと思える気持ちよさ。お酒も自分のためではなく、人々と楽しむために飲む。人が見ていない所でも、人のために祈っているのだろうと感じさせる凜とした姿)

日本仏教の僧侶が社会規範を順守するのは当然。一方、出家的価値観を持つ僧侶は有事こそ価値を発揮する存在。目指す僧侶像を明確に持つことが重要

- ・ 日本仏教における僧侶は世捨て人ではない。菩提心を持つ僧侶が、社会の様々なルールを守ることは当然のことである
- ・ 社会的地位に属さず、世俗と一定の距離を置き、世俗に良い影響を与えるのが僧侶の役割。平時は普通だが、有事こそ世俗的価値観と離れた行為・発言が意味をなす
- ・ 現代において「このような僧侶になりたいという」確かな像を持つことが、僧侶としての正しい動機・自覚を形成する

僧侶の規範

一 生きた儀礼

伝統的な法座での法話や通夜説法、書などの技能を含む

人を仏教に引き付ける際、儀礼は受け入れられやすい

- ・儀礼は信心を背景に、指先までを意識した仏と向き合う身体表現。仏と人々とのつながりを醸成するには、信心を強調するよりも、儀礼を入口にしたほうが間口が広く、受け入れられやすい

細部にこだわる儀礼によって、浄土の仏が目の前にいるかのようなリアリティ(共同幻想)を醸成する

- ・宗教儀礼は共同幻想。導師は丁寧にゆっくり焼香したり、細部にこだわることで、あたかも浄土の仏(本尊)が目の前にいるリアリティを醸成し、本尊と檀信徒のつながりを生み出す
- ・僧侶は自分そのものが方便となり、宗教的な存在に向き合うお手本として振る舞うことが大切。札所巡り。経本・数珠の扱いがこなれ、参加者の満足度(良いお参りができた)が上がる

儀礼の進行において意味性をしっかり伝えることが重要

- ・現代人は場の感性が弱く意味を求める傾向。式次第は法要における演目であり、儀礼の進行において意味の説明を効果的に入れることで、儀礼に対する不満足さが薄まり、場に臨む感性的な感覚を高めることにつながる

定番である伝統的な儀礼の型が、価値あるものとして選ばれるよう、定番に関する物語を強化することが大切

- ・選択肢に溢れた世の中で、余計なことを考えなくてよい(これでよかったのかという迷いが無い)、「定番」という価値を訴求
- ・時代の変化が速いからこそ不動なものが求められる中、歴史に磨かれてきた型に基づく凜とした姿勢は「定番」として訴求しうる
- ・近年、特に葬儀等において定番以外の選択肢が選ばれがちなのは、定番の物語が弱まり、「せっかくだから」と思わせるに至っていないから。周辺を準備しながらも中心(定番)の縁起・物語を強くし、伝える努力を怠らないことが求められる
- ・定番の型と違う異質な儀礼や場においても、導師が司会的な役割を担い、異質なものを積極的に仏教的に意味づけし、「定番」の中に巻き込んで包容していくその場対応力が大切。最終的には遺族に「良い感じでおさまった」と思えれば良い

儀礼の意味性を知ることが、新たな定番となりうる圧倒的な感動のある宗教儀礼を生み出す

- ・超一流は定番の儀礼に込められた願いが分かる。儀礼の意味を知ると応用が利き、新しい定番の創出につながる
- ・これからの僧侶は圧倒的な感動のある儀礼空間を演出する、監督兼俳優でもある
- ・枕経には最優先で取り組んで遺族との接点を深め、戒名は故人の人生の物語・エピソードを凝縮したものを授与する

僧侶の規範

一人ひとりに合わせた傾聴・対話力 1/2

慈悲の表れとして、他者のことを自分事として真心で接することが僧侶のあり方

- ・法話の弁が立たなくてもポロツと良い一言を言う僧侶もいれば、参詣者が悲しく辛い時も楽しい時もただただ読経する僧侶もいる。どのような形であれ、周囲の人のことを我が事として共感・共鳴し、真心でただひたすらに対応することが大切

まずは相手の言葉を傾聴して受容する。対機説法に移行しながら対話で気づきを促す

- ・仏陀は自ら話しかけることはなく、相手からの問いに答える形で対話を展開し、気づきを促した。根源的な問い・悩みに至る前に仏教的な答えを提示すると相手の深まりを阻害するため、最初は傾聴に徹することが重要
- ・宗教の「ほどく」機能として、人間が縛られた一般的な価値観と異なることをあえて許容しながら、自覚的に気づきを促し、深めていく対機説法的な対話が必要
- ・一方的に聞けばよいのではなく、仏教的なエッセンスを伝える、対機説法としてのコミュニケーションも大切

仏法・本尊の本願を発信する表現力の基礎は教義・教学。一方、伝え方は一人ひとりに適した工夫(方便)が大切

- ・教義・教学は、仏法や、寺院の本尊の本願を発信できる表現力につながる
- ・理想に向かっていくためには、一人ひとりに合わせた方便を前向きに活用していくことが大切ではないか

言語ではなく、行為そのものをもとにすることも、相手を受容することにつながる

- ・相手を受容し、苦しみに一緒に向き合うためには、必ずしも傾聴がすべてではなく、一緒に行をすることも参詣者に寄り添うあり方。(例:一緒に坐り(一緒に行をする)、足の痛さを共に感じる)

僧侶の規範

— 一人ひとりに合わせた傾聴・対話力 2/2

仏さまに見守られている安心を感じ、参詣者が自然と手が合わさったり、対話が自ずと生まれるよう、本堂・境内を整えることが大切

- ・仏さま(時空を超える第三者)がいる本堂の場の力は大きい。仏の眼差し見守られている実感は、お寺を離れても続く
- ・ともに合掌することは、仏の前ではみんな横並びになる儀礼。参詣者に「ひとまず仏さまに手を合わせましょう」と促すことで、世間的立場を離れ、安心のコミュニケーションの土台が創られる
- ・幸せは仕合わせであり、おのずと手の合わさるコミュニケーションには、尊敬、感謝、幸せなどの意味合いが生まれうる。本堂や境内において、参詣者が自然と手が合わさる環境を整えて行くことが大切

・【大修館書店「漢字文化資料館」より抜粋】「しあわせ」という日本語の語源は、「し合わす」とされています。「し」は動詞「する」の連用形。つまり、何か2つの動作などが「合う」こと、それが「しあわせ」だということです。別のことばで言い換えれば、「めぐり合わせ」に近いでしょう。自分が置かれている状況に、たまたま、別の状況が重なって生じること、それが「しあわせ」だったのです。ですから昔は、「しあわせ」とはいい意味にも悪い意味にも用いたようです。偶然めぐり合った、よい運命も悪い運命も、「しあわせ」だったのです。さて、現在の私たちは、語源のことはすっかり忘れて「しあわせ」ということばを使っています。ただ、「仕合わせ」と書く場合、「仕」は当て字ですが、「合わせ」の方に、「しあわせ」が本来持っていた、偶然性の名残を見ることもできるでしょう。そこで、たまたま訪れてきてくれたハッピーな状況のことを表したいときには、「仕合わせ」と書くのが好まれる、というわけです。

一人ひとりの多様性が溢れる世の中で、僧侶は場づくりの技法としてのファシリテーションを習得することが重要

- ・多様性の中で、安心のコミュニケーションが成立する環境をつくっていくためにも、僧侶は場づくりの技法としてのファシリテーションを習得することが大切
- ・ファシリテーションは場に生じている関係性、ご縁に目を向けていきながら、場に集う人々に自由をもたらすグラウンドルールを設定していく

僧侶の規範

一 ご縁を大切に作る寺業の構想・実践 1/2

慈悲を根本とすれば、慈悲の具体的な表れは機会・環境に応じて異なっても良い

- ・「菩提心を因と為し、大悲を根本と為し、方便を究竟と為す(大日経)」に則ると、仏の慈悲を地上に降り注ぐ雨とした場合、雨の降る場所が変われば、大悲の具体的な表れは異なる。それぞれのお寺では、その土地の栄養分(土着性)を吸いながら、その土地に合った慈悲の表れ方を追求していく
- ・長野県の名物「おやき」の定番は野沢菜だが、近年はナスやキャベツ等、様々な具材も登場。「おやき＝智慧」と捉えれば、「中身の具材＝大悲」である。おやき(智慧)の素晴らしさを、多くの人に知ってほしいと思う心から発する場合、具材の自由度が高まることも奨励する(葬儀社主導による葬儀形態の改変・簡素化は、おやきではなく饅頭とも捉えられる)

挑戦を奨励することによって、逆説的に本質の重要性に気づくという流れが生まれる

- ・本山の老師は縦糸をつないでいく「野沢菜(定番)」、そうでない僧侶は(横糸として同時代のご縁をつないでいく「キャベツ(挑戦)」)という役割分担。キャベツ(＝挑戦)を奨励することは、野沢菜(＝本質・原点)に気づいてもらうことにもつながりうる

失敗を恐れず、伝統的な収支構造から脱却する挑戦を積み重ねる

- ・本業に悪影響を与えない範囲で、お寺のダウンサイジングにも取り組む必要(例:お堂の統廃合)
- ・葬儀布施を臨時収入にする発想で、違う収入基盤構築に挑戦(「やらないでつぶれるなら、やってつぶれたほうが良い」の精神)

お寺に集う人主導の表現活動が進む環境を整えば、仏教との関連を自ずと考え始め、死生観形成につながる

- ・現代の人たちが驚く象徴的な物語を、仏教側が描くことが必要
- ・僧侶の役割は仏さま(仏性)の邪魔をせず、菩提心が育つ環境を整えること(＝ご本尊に信者がつくことに努める)
- ・表現者は必ずしも僧侶でなくて良い。表現をしたい人がお寺に集う中、自ずと「仏教的な意味を見出す」姿勢が生まれる

寺院の信頼を活かし、死後の安心にもつながる生前からの関係性づくりを促進するバリューチェーンの強化が必要

- ・一人ひとりを檀徒として接せられるよう現在帳整備が大切
- ・お寺は業者よりも地域からの信頼があり、一人身でも安心できる地域レベルの集まりを創造できる可能性
- ・伝統的な行事(例:法話会)に公共性(例:クリーン活動)を付与することで参画が促され、相互の縁づくりも進む
- ・死後の安心とつながりを担保する、仏教思想を背景とした寺院版の生前死後事務委任契約の仕組みの構築が重要
- ・明確な理念と具体的な取り組みを通じて、寺院が死後の様々な事柄の相談相手たりうるという認知を広げる必要

僧侶の規範

一 ご縁を大切に作る寺業の構想・実践 2/2

法定相続の時代に、仏教的意味合いや、永続主体という強みの点から、お寺が相続に積極関与する意義が大きい

- ・遺産相続は先祖の業の相続。住職が語る相続は、仏の教えに基づき、円満におさまる方法を伝えるあり方
- ・崇りは故人が現世の人に悪影響を残すこと。後世に良い関係を残さない不手際は崇りになる。残した人を健全な関係性に編み戻すのが「良い」死に方
- ・仏教的にも遺言は重要。公正証書遺言は理想だが、辞世の句やエンディングノートも効果的。後世への良い言葉・メッセージが紡ぎだされやすい場・環境作りがお寺の役割
- ・儀礼は将来へのしわ寄せを緩和。四十九日等の機会に「遺言書はさみ入れの儀」等を設ける。相続が始まる節目の提供になり、法事が家族にとって新たなスタートとして意義ある場に昇華
- ・遺言は預かる主体の継続性が大切。お寺が預かる意味も大きい

お布施が地域社会に循環し、創造につながりうる新たなご縁が巡っていく物語を、檀信徒や地域社会に伝えていく工夫が必要

- ・創造という観点では、ご縁とは零から1がおのずと生まれ出てくる働きと言える。そのようなご縁が生まれうる環境や取り組みを整えていくことが大切
- ・現状は仏事等の死者儀礼のお布施が循環していく物語が、檀信徒や地域社会に見えていない。お布施が、ゼロから1がおのずと生まれうる日常的な環境づくり・取り組み(掃除、お経の会)に循環していく物語をどう伝えていくかが肝要

ご縁の豊かさの中に生きるいのちに一人ひとりが気づいてほしいと願い、様々な寺業を構想・実践することが重要

- ・お寺の役割は、ご縁の豊かさの中に生きるいのちに一人ひとりが気づいてほしいと願い、様々な取り組みを進めること。そのためには、人・物・金が行き交うエコシステムにつながる寺業の創造が重要であり、その結果が文化創造や地域(社会)貢献につながる
- ・生活者は伝統的なものを求めている。伝統に基づいた革新(未来への創造)のため、僧侶は伝統とのつなぎを期待されていることに加え、今の生活者にとって伝統が日常生活から薄れているため伝統と生活者をうまくつなげる寺業が必要
 - ・感応寺では一代使用料(永代の半額以下)のお墓を設けたが、お墓には永続性を求められる傾向があり、うまくいかず
 - ・西の市、お十夜、報恩講等、伝統行事の革新も大切。お寺の音楽会「誰そ彼」では、法話や読経がよかったという声が多い
 - ・長谷寺の絵解きは、伝統的節談ではなく、仏典・仏伝に基づくオリジナル台本。住職夫人が聴衆と伝統をつなげるクッション機能となり、「合掌しましょう」の言葉で、みんな素直に手を合わせる
 - ・お寺カフェは伝統と現代をつなぐ。お寺・僧侶の個性がにじみ出ることが大切だが、本気でやらないと収支は出ない
- ・様々な創造が生まれる種まきのため、人が行き交う場をつくるのが寺業では大切(例:四天王寺会館、應典院(呼吸するお寺))

伝統的家族観が廃れる中、血縁を超えた疑似家族的な関係性構築が重要。お寺の緩さは共同体感覚の形成に寄与しうる

- ・血縁が途絶える中、血脈やメリット・デメリットを超えた疑似家族的な絆組み・ストーリーが必要
- ・若・壮年期に疑似家族的な関係性(=住職への信頼)を構築できれば、生前契約につながり得る
- ・お寺の良さは緩さ。会話のテンポ、非問題解決志向、同じ方向・景色を見る縁側のコミュニケーションがゆっくりした時間の流れを感じさせ、共同体感覚を強める